



巻頭言

科学者の社会的責任

Social responsibility of scientists



平尾公彦 Kimihiko HIRAO

理化学研究所・特任顧問



この原稿を執筆しているのは2009年11月末である。11月13日に行われた行政刷新会議の事業仕分け作業で、私が関係している次世代スーパーコンピュータ開発プロジェクトが、わずか1時間の議論により「凍結」と結論された。科学技術政策は国の基本方針に従って推進していくものである。多くの科学者や産業界が重要と認め、国家プロジェクトとして進めてきた計画である。専門的な判断はどこで担保されるのだろうか。このような短兵急な結論は、我が国の科学技術、ひいては国民の幸福を大きく損なう。

それにしても今回の事業仕分けはひどい。大学や研究機関の基盤的経費も縮減された。特に深刻なのは大学院生支援や若手研究者の育成、女性研究者支援に関する予算が軒並み縮減されたことである。日本の資源は人材しかない。科学技術や文化によって国際的に知的存在感ある国をめざすことが我が国の生きる道である。その未来を担うのは若い人たちである。一連の仕分け作業の結論は、学術や科学技術の世界をめざす若者に対する負のメッセージであり、学術や科学技術の世界から若者を遠ざけるものである。若い人を見捨てる政治に未来はない。

今回の仕分け事業で強く感じたことがある。それは科学技術に携わる者は普段から学術研究の中身と重要性を社会にわかりやすく伝える必要があるということだ。基礎科学についてはなおさらである。科学技術の研究はすぐには見返りがないかもしれないが、その成果が我が国だけでなく、人類の知的資産の拡充に貢献できることを国民に理解してもらうよう今まで以上に努力しなくてはならない。社会がどれだけその意義を理解し、受け入れてくれるかにかかっている。社会が応分の負担を受け入れる状況ができてこそ、我が国は科学技術創造立国、文化国家としての道を歩むことができる。

20世紀、科学技術は災害や事故を防ぎ、産業を支え、人々の生活に物質的豊かさを供給し、病気を克服して長寿を可能にしてきた。科学技術は間違いなく社会の要請、国民の期待に応えてきた。しかし、この間、科学と技術の深化と細分化が進んだ。豊かで便利な社会を築いた科学技術が、今は少し見えにくくなっている。科学技術が国民からよそよそしいものになっている。科学疎外が起こっている。それにもかかわらず、現代を生き抜くには何らかの科学的考察なしには生きられない。それが現代である。

21世紀に入り科学技術の底流には大きな変化が生じた。人類社会の持続性に寄与し、人を支える科学技術へのパラダイムシフトである。科学は、知識のためだけでなく、社会、平和のためにあらねばならない。私たちは、地球規模で解決すべき環境や資源エネルギーなどの深刻な問題を共有しつつ、文化的生活、福祉、倫理、個人の尊厳などをいかに担保するかという問題の解決に迫られている。社会の期待に応えるために私たちは何をすべきか。ビジョンと目標をわかりやすく示すことである。これまで以上に研究者の社会的責任が問われている。

英訳版は156ページをご参照下さい。English version, see pp 156.

© 2010 The Chemical Society of Japan